

Mixi コミュニティ

『創作が好き!』編集  
第3作品集

見上げるは

What is looked up at is a blue sky

果て無き蒼穹

without an end.

2012年4月1日～5月1日

限定企画

ラスト縛り

『見上げるは果て無き蒼穹』

参加作品集

まえがき

MixiというSNS(ソーシャル・ネットワーク・サービス)には、コミュニティというシステムが存在します。

まあいわゆる『グループ活動』なのですが。

私が副管理人を務めるコミュニティ『創作が好き!』は、『創作活動を行なっている人たちがのんびりと楽しめる場を提供する』という管理人のしちみ黒猫氏の提唱により、現在ののんびりと運営が進められております。

まあそうは言っても、ただ場所を提供するだけでは味気ないですよ。

そこで私は、公園で遊びを提案する子供のように、企画を立ち上げてコミュニティ参加者に作品を提供してもらおうと考えました。

そしてこれまでに二冊、作品集として参加作品をこのサイトにて公開してきました。どれも予想以上の方々に閲覧していただいたようで、公開を決めて本当に良かったと思っています。

今回取りまとめた作品集は、前回の『短篇集』ある日目が覚めるとそこは……』に続けてコミュニティ内で実施した短期イベントの参加作品集となっております。

提案した際の条件ですが、今回は冒頭ではなく、巻末に縛りを設けました。それは、

『必ず主人公に晴れ渡る空を見上げさせ、眩きとともにラストを迎えて頂くこと。』それ以外は文章の長さも、ジャンルも問いませんでした。

澄み切った青空を見上げ、参加者の描いた主人公たちは何を思ったのか。

空想という空を飛ばたく彼らの作品が、あなたの瞼の裏に晴れ渡る空を焼き付けんことを願いつつ。

ぜひご堪能くださいませ。

Mixiコミュニティ『創作が好き！』副管理人

および当イベント企画立案者

榎崎 六呂(かーる)

# 目次

「ちみくちみくうー！」 (P. 5) …… しちみ黒猫 作

(著者紹介 しちみ黒猫)

6月20日生まれ。猫とイルカとドライブが大好きなアラフォー世代。Z世代の時代からネット上にて小説を公開されている、ネット作家の重鎮。

著作に『シヤム猫物語シリーズ』『猫目銀河シリーズ』『月と戦車』『ゆらゆらゆれる』等。  
趣味はドライブとカメラ。隠し芸はピアノと占い。

黒い鴉と黒い猫の話 (P. 9) …… 文流 作

タイトルなし (P. 12) …… 文流 作

(著者紹介 文流)

幻想と現実の境界線を行く短編を得意とする作家さんです。

当コミュニティ上でも幻想的な作品を投稿されています。

好きな作家は桜庭一樹。好きなゲームはRPG。

懐かしい四コマ (P. 11) …… とむ 作

(著者紹介 とむ)

イラストやゲーム制作などを中心に創作活動を進めている作家さんです。

コーヒーは自家焙煎派。あとお酒は洋酒党。ウイスキー。ロックで。

好きな音楽はポッサテクノとか。好きな食べ物・飲み物はオールドパー。

『トール・ハンマー』 (P. 14)

…… 榎崎 六呂 作

私的国語辞典その333『死ぬ』 (P. 27)

…… 榎崎 六呂 作

(著者紹介 榎崎 六呂)

1973年2月福井県福井市に生まれる。消防設備士の仕事の傍ら、高校時代から二五歳まで続けていた執筆活動を再開。ハンドルネーム『かーる』として、MIXのコミュニティ『創作が好き!』にて副管理人を務める。

超短編小説を毎日一作品執筆する傍ら、中長編作品の執筆も精力的に進めている。

執筆作品に、『私的国語辞典』『リトライ』『サンタクローズ☆クライシス』などがある。

プロレスはミーハー的に大好き。詰問と無視に弱い。

『なせと、なにも』 (P. 23)

…… 宇瑠璃春花 作

(著者紹介 宇瑠璃春花)

物語を書くのが好きで、ペンネームは『宇瑠璃春花』と申します。

日頃は、看護師として働きつつ、不定期で自分のアホアホ生活日記と、自作の物語をアップしています。

私の今年の目標は『のんきで楽しく生活する』です。

創作以外に今好きなのは、小麦粉を使ったお菓子やパン作り、落書きをすること、物語やマンガを読むこと、いろんなことを不思議に思って空想してワクワクすることなどです。

厨二をこじらせて三十路でアホやってるしあわせ女魔法使いであります。(・ω・)17

『ちこくちこくう！』（しちみ黒猫 作）

それは、良く晴れた朝のことだった。

「ふえええ、遅刻遅刻う」

セーラー服姿の少女はトーストをくわえたまま、いつもの通学路を全力疾走していた。

沙耶はよくいるドジでおうちよちよいの女子中学生。緋色のミニスカートをひらめかせ、トーストをくわえて走る朝の姿も板についている。

そして、迫り来る曲がり角なども、躊躇なく飛び出して行くのだった。

どげし。

「う……!」

何かにぶつかって、はじきとばされた。人間にぶつかった感触ではなく、全身がもう痛いなんてもんじゃなくて、悲鳴も出ない。自動車にはねられたかと一瞬思うが、それにしちやあふつとばされ方が地味で、とりあえず尻餅をついたぐらい。そうか電柱かなにかにぶつかったのか、とスローモーション思考の中で妙に冷静に確信した。

で、目を開けると、そこにはガンダムが立っていた。

「……」

「通常の3倍の速度で移動してくるとは。この感じ、シヤアか」

RX-78-2のようだが、身長は2メートルあるかないか。デカイと言えばデカイが、それにしちやあなんか小さいと言えば小さい。なんだこれは。沙耶は、思考が固まった。

「お前、シヤアなのか」

ガンダムの目がギュムンと光って、沙耶を見下ろした。

「えーと……そちらは、古谷さんですか?」

「シヤアじゃないのか」

「はあ、すみません」

「ならば、なぜ通常の3倍で移動していたんだ」

「いやそのー、学校に遅刻しそうだったから。っていうか、いまもう遅刻確定っていうか」  
「それは、僕のせいなんですか」

あ。なんか、ちよつとしおらしくなった。と沙耶は思った。

「みんな、僕のせいなんだ」

ガンダムが、頭をかかえてうずくまった。

「あ、あのー。あんまり気にしないでください。あたし、いつものことなんで」

「そうだ。ひとつ、試してみたい戦い方があるんです」

そう言つと、古谷ガンダムは沙耶をお姫様だっこした。そして、バーニア全開で空高くジャンプした。みるみる地面が小さくなっていく。

「きゃー……」

沙耶は悲鳴を上げた。沙耶をだっこしたガンダムは、やがて勢いが足りなくなつて、ゆるやかな放物線を描いて落下していく。ずしゃん！と着地。そしてまた、高々とジャンプ。そのたびに沙耶は悲鳴を上げ、その悲鳴は気持ちの良い青空へと吸い込まれていった。

見上げるは果て無き蒼穹。



黒い鴉と黒い猫の話(文流 作)

おい、と呼び掛けるとそいつは真つ黒な瞳をこちらに向けた。

呼び掛けたはいいが何を言おうか考えていなかったものだから、夏を目前に一層伸びた草を見下ろして唸るしかできない。

何、と言われても何も言えない。

はつきりしない俺を見てそいつは不思議そうに首を傾げている。

なんでだろう。普段はすらすら要らないことまで言ってしまうぐらいなのに。情けねえなあ。頭を抱えたくなる。

そんな俺にそいつは笑った。

また来るから。

それだけで、すとん、と何かが落ちた。

背を向けたそいつに、待ってるから、と慌てて声を掛ける。

明日も来るのか。

そうだ、たったそれだけのことが聞けなかったんだ。

なんでかな。わかんねえや。

去り際に残された艶のある黒々とした羽根を口にくわえて、いつも昼寝する塀へ向かって歩き出し、

——  
また明日。

頭上からの声に顔を上げ、遠ざかる黒点を目で追った。

また明日。

返す声は届いただろうか。

明日になればわかるだろうと黒い尻尾を振って雲のない空を眺めた。  
見上げた空はどこまでも青かった。

黒い鴉と黒い猫の話。

(了)



とおさん 懐かしい4コマ。

タイトルなし(文流 作)

ぱちつと目が覚めて真つ先に時計を確認。

六時一三分。秒針はちゃんと動いてる。随分早起きだ。

普段ならもつと目覚めが悪いのに、不思議なこともあるんだなあ。

大きく伸びをしてベッドを出る。お味噌汁の匂いにおなかが鳴った。

「おはよー」

「は? ……ああ、うん。おはよう」

椅子に座る私に一瞬きよんとした後、にやにやしながら弟は手を挙げた。

対してお母さんは呆れた様子で私のぼさぼさの頭を見た。

「あんた、ちゃんと起きてる?」

「起きてるよお」

「今何時だと思ってるの」

「六時でしょ」

言うてから、はたと気付いた。

弟は私同様、いや私以上に目覚めが悪い。

その弟が六時に起きるなんてありえないのだ。  
つまり。

「……もしかしくなくても、夕方の六時？」

「そうよ」

「あとさ、ねーちゃん勘違いしてるみたいだけど、始業式は来週だよ」

弟が声を震わせて教えてくれた。気付いてたならさっさと見えよ。

私はもう、小窓から空を見上げるしかなかった。

(了)

(作者より)

六時は六時でも夕方の六時。

何時間寝てたんでしょうかね。

『トールハンマー』（檜崎 六呂作）

もうすぐだ。

僕はお堀の脇を走る歩道に立ち、皇居の上空に広がる曇天の空を見上げながら、あと数刻で訪れる『歴史的瞬間』をただひたすら待ち続けていた。僕だけではない。

僕の両側には、僕と同じように空を見上げる『同志』がいた。

御高齢の夫婦や若い女性、大人しそうな女子高生のグループや小さい子を連れた家族連れ、もちろん僕のような冴えない顔をした青年もいた。

手を繋いでいる人や抱き合っている人、ぼんやりと立っている人など、それぞれがそれぞれのスタイルでくつろんでいるが、ここに居る誰もが僕と同じように空を見上げ、来るべきその時を静かに待っている。

僕はその光景を眺めているうちに、得も知れぬ連帯感と充足感で満たされていくのを感じていた。

そんな時だ。

「ちよつとよろしいですか？」

突然声をかけられ振り向くと、そこにはビデオカメラを構えた一人の男性がマイクを向けて立っていた。

「え？僕ですか？」

僕がびつくりしていると、彼はえええ、とあっさり答える。

「そうです。今の心境を伺いたくて」

今の心境？

「つてか、これインタビュースですよね？撮ってどうするんですか？」

僕の素直な質問に、彼はニヤリ、と笑う。

「とても良い質問です。メジャーなテレビ局は早々に国外脱出しましたからね。でもご安心下さい、この放送は皆さんご存知『人間の盾』の方々にご協力頂いて、ユーストリームにて生放送中させてもらってますから」

嬉しそうに一気にまくし立てる彼を、僕の両隣に居た人たちが煩わしそうに見つめる。もちろん、僕だって同じ気持ちだ。

「あの、もう少し静かに……」

僕が多少げんなりとした気分で返すと、彼はああ、すみません、と大袈裟なくらい申し訳なさそうな顔を見せる。

「そうですよねえ。皆さん、来るべき使命に向けて、厳粛な気持ちでいらしてるんですものねえ」

なんだろうこの人。

言ってる事は丁寧なのに、言い方が凄く厭らしい。

「でもね、良いんですか？アメリカさんの攻撃予定は日本時間で午後5時ジャスト、あと少しですよね？」

彼の口調がさらに厭らしさを増した気がして、僕は眉をしかめながら腕時計を見る。今は16時50分。

もういつ降ってきても不思議じゃない時間だった。

『神の雷』が。

「良いんですか、って何ですか？まさかここまで来て『人間の盾なんて馬鹿げてる』とか言わないですよね？」

憤慨した僕の問いに、彼はまさか、と笑いながら答えた。



「アメリカさんの今回の武力制裁に異議を唱えるための『人間の盾』プロジェクト。しかも今回はミサイルじゃなく、史上最悪な衛星レーザー兵器『トールハンマー』への挑戦！」

素晴らしいじゃないですか！と、これまたわざとらしい口調で語る彼に、人の良い僕もさすがに我慢ができなくなってきた。

「なら放っておいてももらえませんか。僕も他の人みたいに、『人生最期のひと時』を堪能したいんです」

そう。

僕は、いや、僕たちは、

既に住民の避難が完了した無人都市東京のど真ん中で、

東京全域を消滅させるといふ超強カレーザーの攻撃から皇居を守る『人間の盾』として、

僕たちはもうすぐ、この場で死ぬのだ。

「いやすみませんね。私もそのつもりでいたんですが、いざもうすぐ死ぬんだと思うと怖くなりましてね。こうやって放送してたら、もしかしたらアメリカさんも攻撃を止めてくれるかもと」

「無理に決まってるでしょー!」

僕はたまらなくなつて彼の言葉を遮る。感情的になつたせいかな素っ頓狂な声が出てしまつたけど、構うもんか。

「石油に変わる代替エネルギーの首根っこを押さえたアメリカに、今や誰も逆らつことなどできるわけがない!」

やつてくれなくては困るんだ。

攻撃停止など、あつてはいけないんだ。

「自分たちに逆らつた日本に温情をかけてくれるほど、今のアメリカは優しくない!」  
僕の声が、次第に叫びへと変わつていく。

僕はここで、痛みもなく消滅するんだ。

くだらない人生から、さつさとおさらばするんだ。

「攻撃は止まらない!僕達はここで死ぬんだ!」

「そうだ!早く撃つて来いや!」

僕の叫びに呼応するように、右側から男性の叫び声が聴こえてくる。

あれは、速水さんの声だ。

さつきまで楽しそうに手元の写真を見つめていた速水さん。

「このクソみたいな人生、さつきと終わらせてくれや！アメリカさんよ！」  
家族をひき逃げ事故で失い、人生のどん底に居るのだと教えてくれた速水さん。

「おいおいあんた、ここにきてホンネ言うっちゃ駄目でしょ？主催者さんが泣くよ？」  
ビデオカメラを抱えたままのさつきの男が、呆れたような声でつぶやく。  
しかし、そんな事知ったことじゃない。

もう一度言おう、僕達は死にに来たんだ。

これまでの人生に終止符をうつために。

「おじさん、そろそろ観念したら？」

僕の隣で座っていた女子高生が、ゆっくりと立ち上がる。その時一瞬だけど、彼女の左手首の疤痕が見えた。

「もうどうせ逃げられないよ。良かったね、最後に前代未聞の映像が残せてさ」  
そう言っただけ嫌味だ。ふりな笑みを浮かべた彼女にビデオ男は言い返すこともできず、  
無言で僕の前から立ち去っていった。

「あ、ありがとう。助かった……」

「感謝なんて良いから。どうせあと1分だし」

感謝の言葉をつっけんどんに返された僕は、彼女に向けた視線をぐまかすかのように  
時計を見る。

16時59分。確かに予定時刻1分前だった。

「私ね、いじめられてたんだ」

突然の告白に、僕は顔を上げて彼女を見つめる。彼女は天を見上げながら、誰に言っ  
とも無く呟いているようだった。

「で、そのいじめてた相手を昨日間違えて殺っちゃってね。もう後が無いんだ」  
そんな事告白されても。

僕は途方に暮れながら、無言で空を見つめる。

あと30秒くらいだと思うが、まだ空はどんよりと曇ったままで何の動きもない。

「僕は、何もなかった」

僕はゆっくりと口を開く。

なんとなく、なんとなくだけど、僕が話し始めた途端に空が明るくなってきた気がする。

「特に感動的な出来事もない、彼女もずっといない、楽しかったことも特にない」  
気がつけば、僕は空を見上げたまま語り続けている。

分厚い雲の上の方でとつもない量の光が収束しているのが、雲の下にいてもわかった。  
「こんな人生があと50年、60年と続くのかと思ったら、何だか飽きてる自分に気がついてさ」

おそらく、あと10秒。

「でもこれで、すべてが終わるんだ」

僕はつぶやきと共に、両手を大きく広げる。

あと5秒、4、3、2、1。

「さよなら！クソつたれな世界！」

僕の雄叫びと同時に、雲が綺麗さっぱり無くなった。  
そこに抜けるような青空を見た直後、僕の視界が真っ白に変わり、  
そして、僕はこの世界から消失した。

(了)

『なせと、なにも』（宇瑠璃春花 作）

また、つくりなおすんだね

そうね、きえてしまったわ

また、つくろう

また、つくりましょうね

はじめはきれいにつくったのに

どうしてきたなくなっただのか

きれいと、きたないをわけたから、かしら

でも、おまえ、はじめはどろからつくったんだよ

たねが、どろみずをすって、きれいなめをだすように

あれらは、どろではいきりれなかった

そうね、あなた、でもあきらめず

こんどは、どろでいきるようにしまししょうよ

そして、こんどは

わたしと、あなたは、ずっといっしょ

ひのごどもはうまないで

うみとたねをうみますわ



ひのないくにでひかりをあびて

つよいめをだす、たねをまこう

そうだね、おまえ

こんどは、いつしよだ

そうね、あなた

ずっと、いつしよ

さあ、どろをまぜて

あたらしくくにを、つくりましょうね

ズラんおまえ、うえをみてズラん

そらというものが、またきれいになったよ

そうね、あなた、そらがきれいね

ズラん、ズラん

ズラん、ズラん

(了)

私的国語辞典 その333 『死ぬ』（榎崎六呂 作）

君は、昼休みに来た公園のベンチに座り、空を見上げている。

抜けるような蒼い空には飛行船のようにゆったりと流れていく雲が浮かび、初夏に向かう途中の太陽はレーザービームのように鋭い光を君の視界に放ち続けている。

『飛行船ってすげえな』

不意に君の脳裏に、高校まで腐れ縁だった友の声が響く。

『あんなにでっけえのに、空にふかふか浮かんでるんだぜ』

「……ああ、すげえよな」

君は過去から届いたその声に心えるようにつぶやく。

君の口から放たれた7文字のつぶやきは突然吹き抜けたそよ風に乗る、ビルに沿って空へと加速していき、

やがてビルを抜けて紺碧の空へと飛び去っていった。

「つてかさ、お前が死ぬなんて、想像すらしてなかったわ」

君は空を見上げながら、自分の言葉が次々と空に上がっていくのを見つめている。君の奥底に眠る哀しみがちくり、ちくりと君の涙腺を刺激する。君の奥底に眠る想いが胸の辺りまでじわりと込み上げる。

もつと話したかった。

もつと一緒に居たかった。

もつと馬鹿笑いしたかった。

もつと。

もつと。

もつと。

「なあ、」

君は見上げた空に語り掛ける。

脳裏では、一七の頃から変わらない姿の友が腹を抱えて笑っていた。

「なあ、」

気が付けば、飛行船のような雲は、遙か彼方に流れ去っている。

まるで、友を失ってから君が過ごした7年の月日のように、  
静かに、

そして無為に、流れ去っていく。

そして君は、大切だった友へ伝えたい言葉を思い付いた。

会いたくてもなく、

ありがとうでもない、

友に心さわしい言葉を。

君は涙でぼやける空に向けてニヤリと笑い、口を開く。

「なあ。調子、どうよ？」

君の放った9文字の言葉は再び春の風に乗り、友の眠る空へと飛び去っていった。

(了)

(言葉の意味)

しぬ「死ぬ」「自」

- ①生物(特に動物)が生命をなくする。
- ②そのものの持つ本来的な生命感や躍動感が失われている。生き生きしていない。
- ③そのものの持つ本来的な機能が有効に働かなくなる。

## コミュニティ紹介

Mixiコミュニティ『創作が好き!』

創作が好き、何かを作るのが大好きなひと、いらっしやいませ。

文芸文学、SFやファンタジー、詩や川柳。絵画やイラスト、立体作品、写真やインスタレーション。音楽や歌詞。ケーキやお料理まで、なんでも歓迎。

とにかく「創る」人のためのコミュニケーションを支援し、その情熱を応援します。

(コミュニティスペック)

開設日 : 2012年02月20日

管理人 : しちみ黒猫

副管理人 : かる

カテゴリ : 趣味

参加条件と公開 :

レベルだれでも参加できる(公開)

トピックの作成権限 :

参加者が作成できる

コミュニティurl :

[http://mixi.jp/view\\_community.pl?id=5922574](http://mixi.jp/view_community.pl?id=5922574)

Mixiコミュニティ『創作が好き!』編集  
作品集

『見上げるは果て無き蒼穹』

-----  
編者 檜崎 六呂

2012年5月6日 第一刷発行

なお、本紙に掲載された著作物は、それぞれの著作者に著作権を有します。